

教材 1「哲学カフェをやってみよう！」

哲学カフェは、情報伝達や合意形成の場ではありません。その目的は、テーマについて話し、聞き、考えるという対話のプロセスそのものを楽しむことにあります。参加者は対話を楽しみながら、いわば副効用的に、一つのテーマについて多種多様な意見や論点、語り方があること、また、立場や意見の異なる他者とのコミュニケーションや共同の探求のために必要な姿勢を学びます。

1 哲学カフェとは？

哲学カフェとは、飲み物片手に進行役のサポートのもと、私たちの暮らしや社会に関わるテーマについて、参加者同士で話し合う営みです。1992年にフランス、パリのカフェで自然発生的に生まれ、その後、世界中に広がりました。日本では2000年ごろから行われるようになり、現在では全国100カ所以上の場所で行われていると言われています。

哲学カフェでは、その場に集まった参加者が主役となって議論をつくっていきます。進行役がセミナー講師のように知識を提供するわけでも、ワークショップのように道筋(手順)やゴールが予め決まっているわけでもありません。哲学カフェは伝達の場ではなく、発見し、探求する場です。それがうまくいくかどうかは実際にやってみなければわかりませんが、うまくいかないこともまた新たな発見につながるでしょう。



2 哲学カフェの構成要素

哲学カフェに、決まった定義や方法はありません。主催者や進行役によって、徹底的に討論する、ふだんのおしゃべりのようにフランクに話す、複数の論点や話題を行ったり来たりする、一つの論点を深く掘り下げる……など雰囲気も進め方も様々です。

とはいえ、開催のために不可欠な共通の要素として、以下を挙げる事ができるでしょう。これらの構成要素には、それぞれ様々な選択肢があります。

(1) 落ち着いて話せる場所と時間

喫茶店、地域のコミュニティスペース、図書館や美術館に併設されたカフェテリアなど、基本的に誰もが自由に入出入り可能で、飲食が許されており、堅苦しくなく落ち着いて話し合える場所が良いでしょう。哲学カフェでは参加者の自発性を重視するので、できれば、参加者の都合や関心によって途中入退場が可能な場所が望ましいです。

時間は、週末など休みの日に2～3時間行われるのが一般的です。3時間の場合は疲れるので、途中で10～15分ほど休憩をはさむと良いでしょう。また、発言者が偏っている場合も、休憩をはさむと他の人が発言しやすくなり効果的です。平日夜に開く場合は、会社帰りに立ち寄りやすいよう、ビジネス街の近くやアクセスの良いところを選ぶと人が集まりやすくなります。

(2) みんなで話し合えるテーマ

まず、テーマの決め方ですが、あらかじめ主催者や進行役によって決められたテーマの下に参加者が集まる場合と、当日集まった参加者にテーマを提案してもらって決める場合とがあります。定期的に哲学カフェが行われ、テーマに関わらず参加者が集まるような場合は、その場に集まった人たちが即興でテーマを設定することもできます。ただ、テーマを見て関心をもつ人も多いので、新しい参加者に来てほしい場合は、進行役があらかじめテーマを設定し、事前に告知しておくことをおすすめします。

テーマを選ぶときのポイントとしては、以下の3つを挙げることができます。



- ・日常生活と関連すること
- ・誰もがそれについて考えることができること
- ・シンプルで根本的な問いを含むこと

初めて参加する人の多い哲学カフェでは、「～とは何か」、「なぜ～か」といった問いのかたちをとる方が、参加者の関心が拡散せず、考えることに集中しやすくなります。ただし、ハウツー的な問いや、特殊な知識をもっていないと答えられないようなテーマは避けましょう。哲学カフェで重要なのは、〈知らないことを知るための問い〉ではなく、〈知っていることを改めて問うような問い〉です。例えば「学校とは何か？」や「人はなぜ怒るのか？」など、知っていることを改めて問う問いは、私たちの生活や会話を成り立たせている隠れた前提に目を向けさせてくれます。

哲学カフェを体験したことがない人のなかには、「2～3時間もあるのにたった一つのテーマで間が持つのか」、「一度に複数のテーマを取り上げたい」と思う人がいるかもしれません。しかし、哲学カフェでは、テーマを一つに絞るからこそ、思考を深めることが可能となります。頭のなかにある疑問や考えを洗い出し、自分の考えをふりかえったり、それぞれの意見を照らし合わせたりするには時間が必要です。テーマを選ぶときは、2～3時間かけてじっくり考えたいと思えるテーマを選びましょう。

参考 岡山大学まちなかキャンパス城下ステーションでの哲学カフェのテーマ例

- | | |
|--------------|--------------|
| 「働きがいとは必要か？」 | 「ワークライフバランス」 |
| 「住みたいまち」 | 「偉人とは何か？」 |
| 「まちと公共性」 | 「学校とは何か？」 |
| 「アートと公共性」 | 「選ぶ人／選ばれる人」 |

(3)対話をサポートする進行役

進行役をするのに、哲学者や哲学史に関する知識は必要ありません。必要なのは、相手の話を聞きながら慌てずゆっくり考えるという心構えです。

進行のやり方に正解はなく、参加者やテーマ、場所、進行役の個性などによって様々です。例えば、ひとりひとりの発言者と進行役で問答を繰り返す「問答型」。このタイプの進行役は、発言者それぞれの意見を一つ一つ吟味し、疑問を投げかけたり、ときには反論したりします。また、いわゆる「ファシリテーター」役に徹する進行役もいます。このタイプの進行役は、自分の意見は表明せず、参加者の発言を助けたり、発言の意味が明確か他の参加者に確認したり、複数の意見の関連を確認したりと、参加者同士の対話を促進させることを重視します。さらに、他の参加者と同じように対話に参加しながら議論を活性化させる、「参加型」の進行役もいます。

フランスでは、進行役は「アニメーター(animateur)」と呼ばれています。これは、「～を盛り上げる」、「～を活気づける」、「～に魂を吹き込む」といった意味を持つ animer という動詞から派生した言葉です。ともに考え対話を活性化させるために何ができるのか自分自身で考えること、そして何より進行役自身が目の前で繰り返される対話を楽しむことが大切です。

(4)テーマに関心のある参加者

もちろん、参加者にも哲学者や哲学史の知識は不要です。テーマに関心があればどなたでも参加可能です。

哲学カフェにおいて、参加者は、主催者が提供するプログラムの「受け手」としてそこにいるというより、議論に参加することによって共に場をつくっていく「担い手」として存在します。参加者がいなければ企画が成立しないばかりか、同じテーマや素材でも、参加者の関わり方によってその場で論じられる内容は大きく変わってきます。

一度も発言せず他の人の発言に耳を傾ける参加者も例外ではありません。発言せずとも、その態度や反応によって発言者の発言に影響を与えることから、彼らもまた場の「担い手」といえます。哲学カフェは、3人でも100人でもできますが、決まった時間で発言できる人数は限られます。「今日はじっくり考えることができ

たな」と感じる対話をふりかえると、どんなに参加者が多くとも、発言者数は自然と12人程度に収まっていることが多いようです。あまり多くの方が意見を述べると、話題や論点が拡散してしまい、せっかく浮かび上がってきた論点を十分に吟味できないまま時間が終わってしまいます。主催者や進行役が「なるべく多くの方の声を聞きたい」という場合はそれもかまいませんが、話すだけでなく「ともに考える」という体験をしたければ、発言者数にこだわるのはやめましょう。重要な意見や仮説を提示してくれた人が他の人より多く発言するのは、自然なことです。

適切な参加者数は、会場の広さや席数によっても変わってきますが、全員が発言し、かつ内容も充実させたいという場合は、定員を10～15人に設定すると良いでしょう。12人までなら、テーマについて全員が自分の意見を述べることができます。15人の場合は、全員が意見を述べるのは難しいので、最後に5～10分程度、感想を語り合う時間を設け、まだ話していない人に感想を述べてもらいましょう。

3 哲学カフェの流れ

(1)趣旨説明

最初に進行役から、簡単に趣旨説明と参加にあたっての注意点やお願いを述べます。哲学カフェが合意形成の場ではなく対話のプロセスを楽しむものであること、何をどういう順番で話すかは決まっておらず充実した時間になるかどうかは参加者次第であることを伝えておくといいでしょう。また、例えば以下のようなことを参加者にお願いしておく、進行の負担も減り、参加者も安心して参加しやすくなります。

発言する／しないは自由です。

自己紹介は不要です。

質問や反論は積極的に。

他の人の話は最後まで聞きましょう。

考えや信条の押しつけはやめましょう。

(2)テーマの提示

次に、その日のテーマを提示します。事前に決まっている場合は、テーマを提案した人に、なぜそのテーマを取り上げようと思ったのかを話してもらおうと良いでしょう。当日テーマを決める場合は、参加者からテーマを提案してもらい、その中から選びます。進行役が独断で決めてもかまいませんし、多数決で決めてもかまいません。対話の時間が減り過ぎないように、10～15分程度で速やかに決めるようにしましょう。

(3)対話

テーマを確認したら、進行役が参加者に発言を促し、いよいよ対話がスタートします。哲学カフェのなかで、参加者は単に自分の意見を述べるだけでなく、以下の作業を繰り返しながら、それぞれの主張や根拠について共同で吟味を行います。

①発言してみる。

参加者は、テーマに関して思ったことや疑問などをとりあえず口に出してみます。

②発言のなかに含まれる主張や意見を確認する。

意見や主張が明瞭でない場合には、進行役の助けを借りながら要点をまとめるなどして、発言に含まれる主張や意見を確認します。

③出された意見に対して意見を述べる。

他の参加者の意見に対して、「先ほどの意見はこういうことだと思う」と解釈を述べたり、反論を述べたりします。

④自分の意見に対する意見を聞いて、どう思うか確認する。

互いの意見の違いや他の参加者の言葉を通して必要があると感じたら、足りない要素を補ったり修正を加えたりしながら、最初の意見を語り直します。

⑤意見の前提を問い返す。

それぞれの意見の前提や言葉の意味を明らかにしながら、主張や根拠について吟味します。

⑥議論をふりかえる。

必要に応じて議論をふりかえり、自分たちがいま何をしているのか、これからどのように議論を進めるべきかを考えます。

(4)進行役

進行役は以下のことを心がけながら、参加者が十分に主張や根拠を吟味できるようにサポートします。

①意見の複数性をあぶりだす。

テーマについて十分に吟味するためには、議論が一部に偏らないようにすることが重要です。進行役は、「いまの意見と違う意見の人はいますか？」と反対の意見を引き出したり、「いまの意見は先ほど出た意見と同じですか？」と意見をつき合わせたり、ときには自ら異なる意見を提示したりして、意見の複数性をあぶりだします。また、長々と話し続ける人、何度も同じ発言を繰り返す人に対しては、発言の要点をまとめてもらうなどして、他の人の参加や発言を妨げないように配慮しましょう。

②発言を引き受けさせる。

哲学カフェでは、自分の経験をもとに話すことが重視されます。しかし、参加者のなかには、自分の意見の代わりに本やメディアで見聞きした情報や知識を持ち出す人もいます。彼らは、理由や根拠を尋ねられても答えられないことが多く、自分の発言を自分で引き受けられていない状態にあるといえます。このような参加者に対しては、「なぜ、いまこのタイミングでそれを話そうと思ったのですか？」と尋ねてみるのも一つの手です。参加者が、自分の発言が議論のなかで持つ意味を自覚し、自分自身の発言を引き受けるきっかけとなります。

③吟味を促す。

進行役は、テーマについて考えるために足りない要素や検討が必要な論点を、その場の議論の状況から瞬時に判断し、参加者自身が考えられるよう促します。例えば、「どうして、それが『差別』なの?」、「『差別』と『区別』はどうちがうの?」と言葉の意味を尋ねたり、他の参加者に「いまの意見について質問はありませんか?」と問いかけたりします。また、議論の途中で、論点を整理したり、「いまの発言は先ほどの意見に対する反論ですか?」と尋ねたりして、参加者自身が議論の状況を自覚できるように仕向けます。

④複数の主張を拮抗させる。

哲学カフェは、単独で真理を追求するより、むしろ、複数の主張が拮抗し合うことによって「本当らしいもの」が浮かび上がってくる場です。例えば、「女らしさ、男らしさ」については、セクシュアルマイノリティも含め誰もが性別を帯びて生活しているため、中立的な立場や唯一の真理はありません。むしろ、立場の複数性やそれぞれの立場からみえる現実の差異こそが、「女らしさ」や「男らしさ」という現象や問題を構成していると考えられます。このような真理を浮かび上がらせるには、単に個々の意見がバラバラにあるのではなく、それぞれの主張が対抗し合いながら互いに屈せずある状況をつくりだすことが重要です。そこで進行役は、わざと反対の主張をつき合わせて参加者同士が弁論を闘わせるように仕向けたり、参加者の一人と一对一の議論を展開したりして、議論に簡単に決着がつかないようにします。

一回一回の議論の充実度は、以下の3点にかかっています。

テーマが人々の潜在的な関心に訴えることができるか

集まった人たちが自らの関心をもとにその場で即興的に議論を構築できるか

進行役はこの2点を考慮して適切に進行できるか

そのためには、もちろん、進行役による独善的なテーマ設定や進行法ではうまくいきません。参加者の声に耳を傾け、即興で繰り広げられる予想外の展開を楽しみましょう。

(5) 終了のあいさつ

哲学カフェの最もシンプルな終わり方は、「時間がきたのでお開きにします」という進行役の一言です。参加者たちから「もっと話したい」という声が出るかもしれませんが、そう思わせることができれば哲学カフェは成功です。だらだら延長せず、時間通りに終了しましょう。

哲学カフェは合意形成の場ではないので、結論は不要です。しかし、可能であれば、最後に進行役からその日の話し合いのまとめを述べるとよいでしょう。どこが重要だと思うかは人それぞれなので、「ここが特に心に残りました」といった主観的な感想でも十分です。

4 哲学カフェと主権者教育～対話が生み出す21世紀の市民像

哲学カフェは、主権者教育を明白に意図して行われるものではありません。しかし、結果的に市民的素養のトレーニングになっている側面もあります。

哲学カフェが政治教育としての意義を持つために、必ずしもテーマが政治的である必要はありません。そして、テーマ設定の動機が政治的であるからといって、必ずしも対話の内容が政治的になるとはかぎりません。例えば、岡山大学のまちなかキャンパス城下ステーションで2013年3月に取り上げられた「安心とは何か？」というテーマは震災への関心から提案されました。しかし実際の対話では、「旅行から帰ってくるとほっとするのはなぜ?」、「防犯灯がついていると、かえって『ここって、そんなに危険なの?』と不安になる」といった全く別の話題から、「安心と安全は反比例の関係にあるのではないか」という興味深い議論が展開されました。政治的な関心から設定されたテーマであっても、対話が始まってみると参加者の個人的な経験談で盛り上がり、それがテーマについて新たな発見をもたらしてくれることは少なくありません。

哲学カフェの政治教育としての意義は、テーマではなく、むしろ、立場や意見の異なる多様な人と対等に話し合うという営みそのものにあります。同質性が高い友人・家族・同業者同士のおしゃべりとは異なり、初めて会う人々と信頼のある対話を経験することは、社会への関心を高め、人の意見に流されない自分の判断力を身につけることにつながります。

近年、教育やビジネスの場では、クリティカル・シンキングを身につけることが推奨されています。そこで重視されるのは、対象を客観的かつ論理的に捉える思考です。しかし、民主主義社会は、むしろ、多様な意見(主観性)が存在するという事実を受け入れることによってのみ可能となります。真にクリティカルな思考を実現するために、私たち市民は、他者の意見に耳を傾け、理解しようとする受容性・寛容性を身につけなければなりません。それは、決して「他者の意見に迎合する」ということではありません。哲学カフェでは、知識の量を試すのではなく、どのような考えが存在しているのかを重視するので、自由な語らいを通じて、参加者の立ち位置や考えが鮮明になっていくことがあります。そこで参加者は対話を通して、まちの中には多様でかつ異なる意見に溢れていることを体験的に学びます。また、他者との言葉や思考のやりとりを通じて、自分自身の思考を見つめ直すこととなります。

- ▷ 相手の伝えたいことをきちんと理解できているか？
- ▷ 自分の伝えたいことが相手に伝わる言葉になっているか？
- ▷ 自分の考えは本当に正しいか？
- ▷ それはどんな信念や価値観を前提としているか？
- ▷ 何か見落としている点はないか？
- ▷ 本当の問題は何か？

哲学とは、そのような思考と言葉の練り直しのプロセスそのもののなかにあります。そしてそのプロセスがそのまま、政治を考える大事なレッスンとなります。他者を理解し、他者とともに助け合いながらも、他者に迎合することなく、自分自身で考え、自分自身の言葉で語り、自分自身の言葉を引き受ける。哲学対話で求められるそのような態度こそ、市民に求められる政治的態度といえるのではないのでしょうか。

参考文献

- 鷲田清一監修、カフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』(大阪大学出版会)
- マルク・ソーテ著『ソクラテスのカフェ』(紀伊国屋書店)
- 篠原一『市民の政治学』岩波新書